

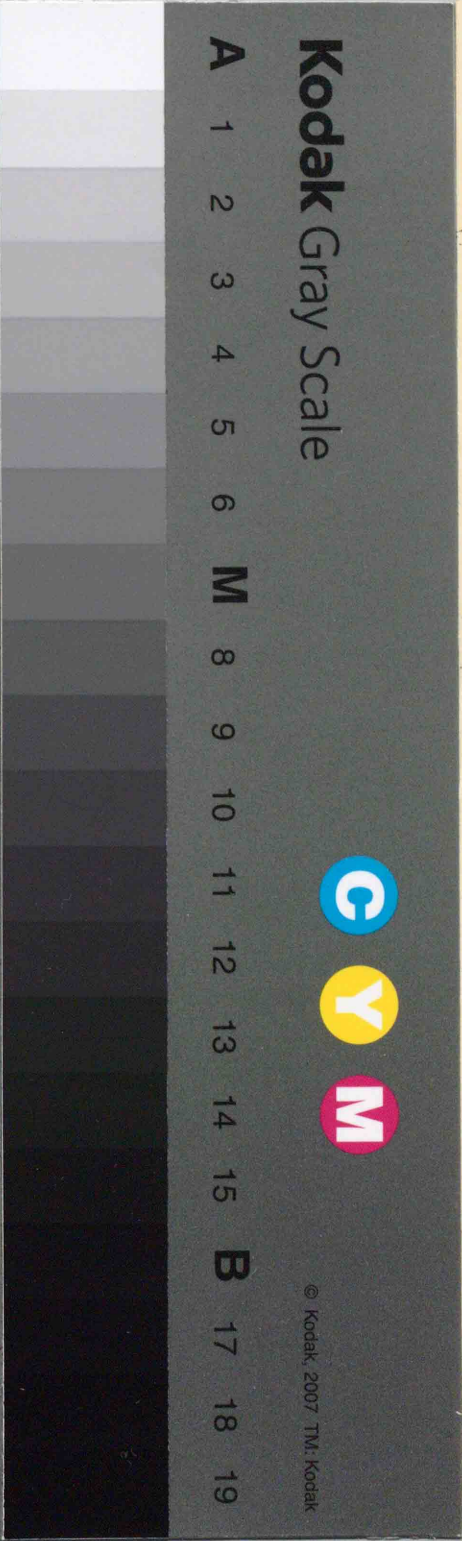
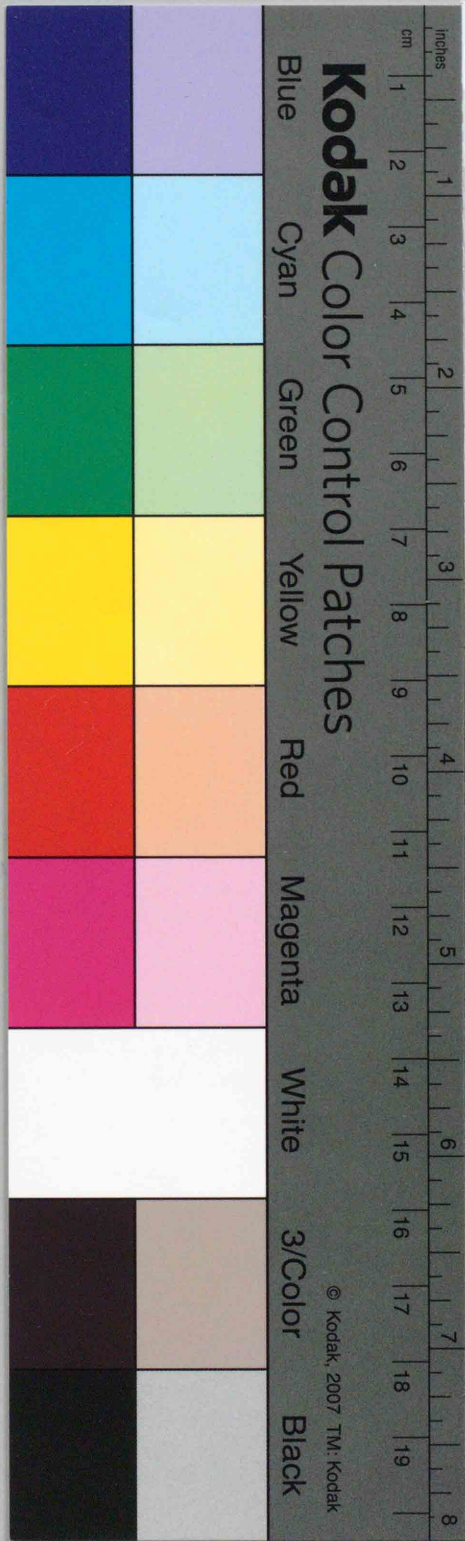
新制
中學修身教本

二卷
湯原一元著

教科書文庫
4
110
41-1928
2000054294



東京開成館藏版



40507

教科書文庫

4
110
41-1928
20000 54294



© Kodak, 2007 TM: Kodak



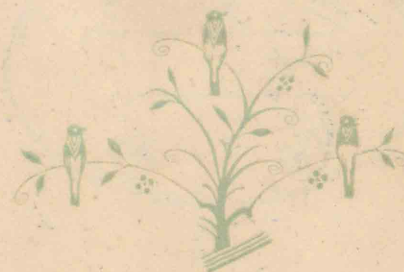
資料室

文部省檢定
昭和三年一月二十五日
中學修身科用

教科書文庫
4
110
41-1928
2000054294

新制 中學修身教本

湯原一元著



東京開成館藏版

広島大学図書

2000054294



375.9
Yu8



中學教科書本

第一卷



天祖の神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂國はこれ吾が
子孫の王とますべき地なり爾皇孫就て
治らせさきく寶祚の隆えまさんこと天
壤と與に窮なかるべし

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹
ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心
ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精
華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ
德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良

ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス
ルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外
ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其德
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此
相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ
友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期
ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセム
トスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尚淺ク庶政
益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉
産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就
キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成

跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠
ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局
ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇
猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣
民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

明治四十一年十月十三日

內閣總理大臣副署

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ
涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス
是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵
源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シ
タマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ
申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シ
テ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ
爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致
セリ朕即位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ
俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習
漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革
メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ
災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ
精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ
振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實
效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德
ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ
斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ
歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ
保テ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛

共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治
メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテカヲ公益世務ニ
竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖
ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ頼リテ彌國本ヲ固クシ以テ
大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名 御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

各國務大臣副署

新中學修身教本 卷二

目次

- 一 抑へよ、そして支配せよ……………一
- 克己自制……………一
- 二 自重……………六
- 三 眞實を愛する心……………二
- 虚偽……………二
- 四 約束を守れ……………七

目次

一

五 従順……………三

わだかまりのない心

六 自主……………六

七 廉恥……………三

八 勇氣……………七

九 注意が大切……………四

一〇 油断大敵……………四

得るは難く、失ふは易い

一一 勤勞……………三

一二 習慣……………五

五

一三 中庸……………六

一四 流行に迷ふな……………六

一五 読む物、見る物、を擇べ……………七

小説の利害

一六 禮儀作法……………七

一七 尊敬しあひ譲りあへ……………八

一八 悪よりも善を……………七

人に知らせるのは

一九 公德……………九

公衆道德

二〇 家に在つて…………… 六

二一 偉人の感化…………… 一〇〇

英雄崇拜

追録…………… 一七

新中學修身教本 卷二

一 抑へよ、そして支配せよ

克己自制

抑へねばならぬもの

「抑へよ。」といつても、人を抑へようとするとは反抗するから、これを自分の意のままに支配するわけにゆかぬ。またそんなことをする必要もない。たゞ我等が善い人、正しい人にならうと思ふなら、せひこれを抑へつけて、我等の思ひどほりにならせねばならぬものがある。それは

一 抑へよ、そして支配せよ

一

抑へねばならぬ慾

我等自身の中にあるいろ／＼のよくない慾である。慾が勢を得て逆に我等を支配するやうになると、我等は人としてはもう敗北者だから、人なみに自主獨立してゆくことができぬ。

我等が抑へねばならぬ慾には、金錢慾、名譽慾など數限りなくあるけれども、それが一時に起つて我等を苦しめようとするわけではない。多くは年齢の長ずるに従つて、つぎ／＼に起つて来るから、そんなものはその場合になつてから抑へるやうにすればよい。たゞとりわけ多く青年の頃に盛である慾の抑へ方については、當面の問題として今日に於て十分よく考へる必要がある。

飲食の目的

身中の養分は心に入り
胃の消化力に依り
消化ス
消化の目的といふ
ことには要がある
即ち分る程
クシ、時間、定む
食料も、その時
に依り

舌の密官

自己保存、道具
食物の消化
言語、飲食
呼吸、利便
手、物言、聲言
キキワケル

胃

舌

まづ胃の慾、これを抑へることは年が若ければ若いほど大切である。この慾の強いために、どれだけ多くの青年がなやまされてゐるか知れぬ。ところが、これを抑へるのはたやすさうで、實はなか／＼むつかしい。衛生上の理窟はよくわかつてゐても、いざといふと、勃發する慾の勢に捲きたふされてしまふ。

次に支配せねばならぬのは舌である。舌をとほして働く慾には、肉體的のものもあれば、精神的のものもある。肉體的のものとしては、煙草を吸つたり酒を飲んだりしたがるもので、精神的のものとしては、おしやべりうそつきなど、「言葉」のところ(六卷一課 參照)で戒めてあるものなどがある。

白專
いよいよ
皮膚
筋肉
熾るに動
の道具となる
善悪は心により

克己自制

る。こんなものの弊害は我等のすでに知つてゐるところだが、舌を抑へてこれを支配することも、また案外むづかしいものである。
その外、目でも、耳でも、鼻でも、皮膚でも、筋肉でも、油断をするといろ／＼な慾の道具になつて、我等のためにならずに、かへつて我等を悪い方へ誘ひ出すものである。我等はこんなものが我等の味方であると同時に、うまくこれを支配しないと、一轉して我等の敵になることを知らねばならぬ。もちろん以上のやうな身體の一部分が慾の持主だといふわけではなく、その持主はやはり我等自身だから、これを抑へるのは、取りもなほさず自分で自分

克己自制と修養

を抑へることになる。そして、これがいはゆる克己自制である。克己自制などといふと、えらいむづかしい修養の方法でもあるかのやうに思はれるけれども、その實は、右に説いた飲食を節制するやうなことを、廣く精神生活のすべてに推し及ぼしたものに過ぎぬ。
かやうに、その事がらは極めて簡單でも、東西古今を通じて、修養といふと必ずおもに克己自制によつてゐるのは、ちやうど雜草を抜かないと苗がよく育たぬやうに、悪い慾のために人の善い天性が妨げられるし、またこれができる、修養の目的はすでに八分どほり達したといつてもよいぐらゐるだからである。しかし、慾でもそのよい

ものはこれを十分伸ばしてやらねばならぬから、たゞこれを抑へるばかりが修養のすべてではない。

二 自重

昔から、人物といはれるほどの人は、多くは才子からよりはむしろ凡人から、また富貴の家からよりはむしろ貧賤の家から出てゐる。この事實を考へると、人物を作り出すものは生れつきの才不才または親ゆづりの門地財産などではなくて、自分の奮發勉強であることがわかる。だから、堅く志を立てて努力して已まないと、誰でも相當の人物になれるばかりではなく、よい機會があると、いは

恐ろしい人の力

運命と人力

ゆる英雄豪傑にもなれるものである。人の運命は生れる前からすでに定まつてゐるやうにも見えるけれども、その實はずるぶん人の力でこれを左右することができ。昔から大きな事業をして、その名を後世に記念される人は、たいてい最初の頃は幸運に見すてられたのではないかとさへ思はれるほどのものが多い。それにもかかはらず、彼等はいくまでも所志を枉げず、どこまでも奮進して、遂にその目的を達したのである。恐ろしいのは人の力ではないか。

志あれば事竟に成る(光武帝、後漢の第一世)

自分から悔るな

こんなには人の力は偉大だから、この偉大な力を具へてゐる我等は、たとひ身分が低く財産に乏しくても、決して

自分から侮つてはならぬ。孟子の語に、それ人必ず自ら侮り、然る後人これを侮る。」とあるが、これはドイツの哲學者カントが、「誰でも自分自身を蟲にするものは、他人から踏まれても憤る権利はない。」といったのと同じ意味である。せつかく自分の具へてゐる偉大な力を認めることができず、自分から侮つて卑屈な心になるのは、自分自身を蟲にするものである。これに反して、早く自分の力の偉大なことを自覺し、これによつて立身出世を企てようとするものは、必ず自然に自重の念を起して、人としての品位をおとすやうなことはせぬ。佐久間象山はかつて、「予、年二十以後はすなはち匹夫も一國にかゝるあるを知

自覺と自重

佐久間象山の
自重

責任と自重

り、三十以後はすなはち天下にかゝるあるを知り、四十以後はすなはち五世界にかゝるあるを知る。」といつて、平生大いに自重した。彼が一代の先覺者として當時の識者に尊敬されたのは、實にこんな抱負をもつて自重してゐたからである。

右の象山の語は、象山ほどのえらい人でないといへぬけれども、しかしまた、よく考へて見ると、誰でも世間に對して案外重大な關係をもつてゐることがわかる。我等の一身の幸不幸は、我等の一身にとゞまらず、家族にも社會にも國家にもその影響を及ぼすものである。また青年はいはゆる未知數だけれども、父兄はもちろん、一般世

何故に自重せぬか

人もこの未知数が將來なるだけ大きな數となつてあらはれることを望んでゐる。教育のためといふと、公私とも多大な経費の支出をさへ惜しまぬのは、實にこれがためである。だから、こんな世間の期待にそむくまいと思ふなら、我等は深くその責任の重大なことを感じて、大いに自重せねばならぬ。

人の偉大な力を認めず、また世間との關係を知らず、ただ自分の一身ばかりを見てゐる人が、多數の人の中の一人ぐらゐるが多少よくないことをしたからといつて、あまり害はあるまいと考へるのは無理ではない。青年が概してまだよく自重しないのは、おもにこんな考があるか

天の我以必
 用ひんとす
 る所以は必
 ず我と我
 我を以て
 用ひんと
 するなり
 と我
 行ふこと
 を得
 ざるを
 名づけ
 て天を
 棄つと
 いふ
 (蘇洵、宋の
 學者)

天を棄てるな

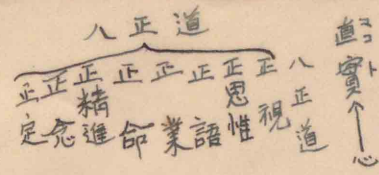
是非の分別を
 惑はすもの

らだらう。しかし、誰も彼もこんな心になると、社會の氣風が一般に衰へるから、たゞの一人でも決してその責任を盡すことを怠つてはならぬ。その上、せつかく與へられてゐる偉大な人力を利用しようと思ふのは、いはゆる自暴自棄で、自分から侮ることの甚しいものである。古人はこれを「天を棄てるもの」といつた。我等は天を棄てる人となつてはならぬ。

三 眞實を愛する心

虚 偽

およそ是非善惡の判断は、或程度までは誰にもできる



心を愛する心
 良心はよく道理に
 合はぬ周遊する
 一切の事
 正しき道は心の道
 んい行た
 トイフは心ナリ

昭憲皇太后御歌
 かへりみて心
 にとはば見ゆ
 べきを正しき
 道に何まよふ

はずだのに、實際は最もわかり易い事がらについてさへ誤つたことをする人の多いのは、これはおもに前に説いたやうに、いろ／＼のよくない慾にその心を惑はされるからである。だから、人がいつも正しい道を歩んでゆくには、まづこのよくない慾に打克たねばならぬ。そして、またそれに打克つたためには、平生から自分は良心に反し、道理に合はぬことは一切しないといふ堅い決心をもつてゐることが必要である。こんな心を眞實の心または眞實を愛する心といふ。こんな心が十分具はつてゐると、その人こそ必ずいつも正しい判断のまゝ、あつぱれ男らしく言ひもし行ひもするから、こんな人が世の中に

虚偽

虚偽を許すは
 らぬならば、
 むしう窃盗を
 許すといふ
 (ア、オ、イ、カ、ラ
 ンド、イ、ヤリ
 スの政治家)

多くなればなるほど、不正直または不眞面目などといふいろ／＼の悪徳がその勢を失ふわけだから、世の中はどんなに改善され、その國家の品位もどれほど高まるか知れぬ。善い行はいつの世にもあるけれども、それが眞實を愛する心から出ないと、時としては偽善に過ぎぬことがある。

眞實の反対は虚偽だから、本當に心から眞實を愛する人は必ず大いに虚偽を憎む。眞實を道德の根本と見る西洋人が、虚偽をどろばうよりも大きな悪徳としてゐるのはそのためである。彼等は、人にどろばうと呼ばれるよりも、うそつきと呼ばれるのを一そう甚しい侮辱と感

虚偽は百惡の源

俗虚偽と我が國

じる。そのわけは、どろぼうは人の物を盗むだけだけれども、虚偽は人の心までも盗むから、一そう罪が深いといふのである。だから、子供を躾けるのにも、虚偽を百惡の源として最もこれを戒めてゐる。

ところが、我が國では、この二つが西洋とは全く反對に考へられてゐる。「うそはどろぼうの始まり」といふ諺は、正しくうそをどろぼうよりも軽く視るしようこであつて、甚しいのは、「うそも方便」などと公言して憚らぬことさへある。交際上の世辭などは、心にもないことをいふのがむしろ普通になつてゐる。つまり西洋に比べると、我が國では虚偽がいくらか大目に視られてゐる。そのた

眞實は品性の脊骨

學問と眞實

めに我が國民はしばしば西洋人などから誤解されることがある。我等は一日も早くこんな惡習を改めねばならぬ。

有名な「自助論」の著者スマイルズが、眞實は品性の脊骨である。といつたとほり、人に接し世に處するのに、眞實を本としないと、世人に相手にされぬから、ちやうど脊骨のない人が眞直に立てぬやうに、りつぱに世の中に獨立してゆけぬ。たとひ一時はうそいつはりで成功することがあつても、いつかは人にその不正を看破されて、遂には失敗に終るにきまつてゐる。

眞實を愛する心は單に道德上に必要なばかりでなく、

學問の進歩もまた主としてこの心に基づく。我等が樂しんで毎日の課業を勵むのは、學科の中に含まれてゐる眞理即ち眞實が、我等のこれを愛する心を満足させるからである。學者が寢食を忘れて専心研究に従事して、種の發明發見などをするのも、眞實を愛する心が特に盛だからである。利益や名譽ばかりを目的とする研究は、それが得られぬやうになると止んでしまふが、たゞ眞實を愛する心から起つた研究だけは、利益名譽の有無にかかはらず永く續くもので、これが眞の學問である。

要するに、眞の道徳も、眞の學問も、もとは皆眞實を愛する心から生ずるものだから、十分にこの心を養成するこ

修養の第一義

とが、我等の修養の第一義であらねばならぬ。

四 約束を守れ

約束を守らないと、他に迷惑をかけるばかりでなく、これをしばしば繰返すと、遂には全く自分の信用をも失ふやうになる。

我が國でも、昔は一般に國民が約束を重んじ、武士に二言なし。などといふ格言もあつて、一旦約束したことは命にかけても果す美風さへあつたが、今日ではこんな美風もだん／＼衰へて、諺に「紺屋の明後日」などといふやうなことは、商業上などでは少しもこれを怪しまぬやうにな

約束と信用

違約の弊風

つてしまつてゐる。こんな弊風は、たゞ商業上に限つたことではなく、社交上にもまた甚しいものがある。たとへば、集會の場合に、定刻に參集することなどは、どんなにその厲行の必要が叫ばれても、やはり依然として實行されぬ。そのため自他の蒙つてゐる損害はどれほど大きいか知れぬ。

それなら、堅く約束を守るのにはどうしたらよいかといふに、まづ自分の力にかなはぬことを約束してはならぬ。約束を違へるのは多くは怠慢に基づくものだが、またその力の及ばぬところから、己むを得ず違約することもある。後者は前者に比べるといくらか恕すべきでは

よく考へて約束せよ

情實をしりぞ
けよ

あるが、しかし、輕率の責は免れることができぬ。だから、約束する時には、まづ自分の力やその他の事情が、果して約束の履行を許すか否かを考へねばならぬ。その上、我等はまだ父母や先生の監督を受けてゐる身だから、事からによつては、たとひ約束しても、その許可を受けねばならぬことを忘れてはならぬ。

次には、一切の情實をしりぞけることのできる勇氣が必要である。人から何か頼まれた際に、「はい」といふのは易いが、「いや」といふのは案外むづかしい。しかし、履行の望のたしかでないことを約束して、他日人から怨まれるよりは、初に多少氣の毒な思をして、これをことわるの

がつまりは自他のためになる。これは誰でも知つてゐることだけれども、その実行ができぬのは、人は誰でも情實になづみ、または名利に誘はれ易い弱みをもつてゐるからである。だから、こんな場合を切抜けるのには、まづよく事の是非を考へて、諾否を明言する勇氣を振ひ起すより外に途はない。

約束は必ずこれを守れといふのは、いふまでもなく善い約束についてだけである。後で悪いと氣づいた約束までもこれを守るのは、自分にとつてはその非を遂げることになり、人に對してはその悪を見逃すことになるから、こんな場合には、宜しく斷乎としてその約束を破つて、

悪い約束

自己に對する責任

いさぎよく自分の過を謝し、そして、負はねばならぬ責任を負ふべきである。さうでない、この悪い約束を守つた罪の報として、他日一そう重大な責任を負はねばならぬやうになる。

約束はたゞ相手に對する義務としてこれを守るばかりでなく、自分の責任上當然果すべきこととしてこれを履行せねばならぬ。相手がその履行を求めぬ場合にても約束を違へるのは、やはり人をいつはり己をあざむくものである。約束は人に對して結ぶと同時に、また自分に對してもこれを結ぶものである。我等が必ずこれを果さうと決心して人と約束する瞬間には、人の心に對し

てよりも、むしろ多く自分の心に對して義務を負ふものだから、本當に信義を重んずる人は、相手の考の如何にかかはらず、専ら自分の心に對する責任として、必ず約束を果すのが當然である。

昔、支那に季札きさといふ人があつた。かつて或國王に見えた時、國王が自分の劔をほしがつてゐるのを知つて、これを與へようと思つたが、都合があつてその場ではこれを與へなかつた。その後少し年を経て、季札が再びその國王を訪うたところ、國王はすでに死んだ後だつたので、劔をその墓所の木の枝にかけて去つた。その時、季札は從者の怪しんで問ふのに答へて、初め我が心すでにこれ

季札の信義

を許せり。豈に死を以て我が心に倍そかんや。といつたさうである。これこそ自分の心に對して約束し、その上、これを履行したものであつて、ほんたうに信義を重んずる人といつてよい。

五 従 順

わだかまりのない心

すべて何か行つて見ようとするのには、自分でよくその是非を判断して、自分の執るべき方針を定めねばならぬ。ところが、我等はまだ經驗も淺く考も熟しないから、自分の判断だけでは是非を定めることのできぬ場合が

老成の意見を
聽け

ある。だから、この時期においては、よく父母や先生の意見を聽いて、その教に従ふやうにせねばならぬ。これを從順の徳といふ。もし自分の狭い料簡りょうかんだけでかろくしく事を決すると、意外な過をおかして後悔することが多い。

しかし、人の意見を聽く場合には、たゞそのさしづを受けるだけでなく、またよくその理由を會得えいとくすることを心がけねばならぬ。よく理由を會得してから行ふと、人の意見に従つても、ほとんど自分の意見によるのと異なるところがない。たゞし、場合によつては、理由を聽くいとまもなく、そくざに人のさしづに従はねばならぬことも

理由の會得

從順の習慣

ある。たとへば、團體的行動をするのには、一に指揮者の命令に従ふやうなもので、こんな場合に一々理由を問うてゐては、とても敏活な行動はできぬ。

青年の時期に老成した人の意見に従ふ習慣を作るのは、他日自分の考の熟した場合に、たやすくこれに従ふことのできる準備になる。今日人の意見に従ふことのできぬものは、他日自分の所信に従ふことのできぬものとなるから、我等は他日獨立自治の人になるためにも、青年の時期においてこの習慣を作つておかねばならぬ。

青年の時期にあまり我意が強くて、人の意見を聽かないと、學業も進歩せず、道德も向上せぬ。こんな人はたゞ

我意

從順と屈從

自分の考だけを守つて、新に識見を廣めようとしなから、とても賢い人などにはなれぬ。すなほに人の意見を聽くのは意氣地なしのやうに見えるけれども、實は心がけのよい青年ほど喜んで人の教を受けるもので、特に伶俐な青年は、先輩の忠告などをぼんやりと聽き流すやうなことがない。

時として從順な人を男らしくないと思ふもののあるのは、從順を屈從と混同するからである。屈從とは、事によしあしを問はず、専ら利をもつて誘はれ、勢をもつて威されて、他人のいふまゝになることだから、こんな行は人としての面目をけがすもので、その賤しむべきはもちろ

わだかまりの
ない心

んのことである。

ところが、概していふと、青年の心は常に打開いて、そこには何物でも受入れることのできる餘地がある。この打開いた心、即ちわだかまりのない心が、實に青年をして自分から進んで人の意見を聽きいれて從順にならせるものである。だから、青年の從順は他から強ひられるものではなくて、その特有の美しい心の自然の作用だといつてよい。これがどこの國でも從順を青年の美德とするわけである。我等はこれを屈從などとはきちがへて、大切な美德を失はぬやうに氣をつけねばならぬ。

自主の人

六 自主

大人は自分から道徳上善いと信ずることを堅く守り、その上、これを實行せねばならぬ。これができる人が即ち自主の人である。詳しくいふと、自分で自分の心の主人となつて、自分を取りしめることのできる人である。人の誘ふまゝに右にも左にも心が動くやうな人は、何事も成しとげることができぬ。自分の良心に問うて善いと思ふことは、誰が何といはうとも、勇み進んでこれを實行することのできる人であつてこそ、始めて他日りつばな人物になれるものである。

多數の意見だからといつて、その是非を問はずにこれ

盲従雷同を戒めよ

大瀬 修二

六 自主

六

道理にたよれ

に従ふのを盲従といひ、また雷同ともいふ。思慮のない子供がたゞ人の導いてくれるまゝに従つてゆくのはしかたもないが、相當に判断の力をもつてゐる人が、子供のやうな行をするのは、いかにも意氣地のないことである。善いと思ふことは一人でもこれを守るばかりでなく、また一人でもこれを行はねばならぬ。場合によつては、多數の人に嫌はれてもかまはないと覺悟する必要がある。多數の人が好まない、善いことでも善いと言ひはることができぬやうではいつまでも自主の人にはなれぬ。

どうも我が國民は昔からの修養のしかたが個性的でないためか、一般に何事についても雷同に傾きやすく、と

六 自主

六

史記にある語

りわけ青年はさうである。これは青年がまだ十分に道理を知らぬからであるが、また知つてもこれにたよらうとしないからでもある。多数の人の力も強いが、道理の力はそれよりも一そう強い。道理は一時多数の人に負けても、最後には必ずこれに勝つもので、古語に、人衆おほければ天に勝ち、天定まればまたよく人に勝つ。とあるのは、即ちこのことである。だから、同じたよるなら、多数の人よりもむしろ道理にたよる方が安全である。歐米の青年には道理にたよる習慣が比較的よくついてゐるから、従つて徒に多数に雷同する弊もまた比較的少い。これは我等の大いに學ばねばならぬことである。

剛情者・偏屈者

道理にたよるのには、まづ道理を知らねばならぬが、これが容易なやうでなく、むづかしい。道理はまた誤解されることが少くない。とりわけ道理の一面を見てこれをその全體と誤解する例は、青年に最も多い。だから、一旦善いと信じたことは必ずこれを堅く守り、その上、これを實行せねばならぬといふのは、善いと信じたことがほんたうに善いことである場合にだけ限るべきである。ところが、世には誤解された道理や、またその一部に過ぎぬものをあくまでも堅く守り、その上、これをどこまでも貫かうとするものがある。これは道理にたよる自主の人のやうに見えても、その實はたゞ自分の我見を通

さうとするもので、世にいふ剛情者または偏屈者である。こんな人は強いやうでも、その考が誤つてゐるばかりでなく、往々負惜まじみをして、誰が何といつても容易に自分の過を改めようとはしないから、いつの間にか身の禍を招いて、必ずどこかで失敗するものである。

偏見についての反省

我等は平生からよく道理の力を唯一のたよりにする習慣を作るとともに、自分の信ずる道理はもしや自分の偏見ではないかと時々反省して、ほんたうの自主の人となるやうに心がけねばならぬ。

七 廉 恥

破廉恥

世には、悪いと知りながらも悪いことをして、平氣であるものがある。これを破廉恥はれんちの人といふ。破廉恥の人とは恥を恥とも感じないものといふ意味である。普通の人には良心があつて、悪いことをしようとする、それをさせまいとして反抗する。たとひ反抗しないまでも、ひそかに苦痛を感じさせる。廉恥れんちの心または羞恥しうちの念と稱するものは即ちこれである。こんな一種の道德的感情があるので、人はなるだけ悪いことを避けて善い行をしようとするのである。ところが、破廉恥はれんちの人はこの感情がにぶつてゐるから、とかく道德から遠ざかるのである。

自責の念

恥かしいといふ感じは、良心に對して起るものだから、眞に恥を知る人は、他人の知らぬ過についても、やはり自分を責めるけれども、世には他人に自分の過を知られて、始めて恥かしいと思ふものが多い。中には、たとひ他人にその過を知られても、法律の制裁でも受けぬかぎり、なほこれを恥と思はぬものさへある。こんな人は孔子のいはゆる「免れて恥なし」の徒で、いふまでもなく破廉恥の人である。

自尊心と恥かしさ

恥かしいといふ感じは、たゞ良心に對して起るばかりではなく、また自尊心に對しても起る。たとひ良心に對しては少しも疚やましくないこと、たとへば、理由もないのに

面目

他人から加へられる侮辱などについてでも、非常に恥かしいといふ感じを起すのは、その人に自尊心があるからである。世間で通常「面目を重んずる」といふのは、即ちこの自尊心の外部にあらはれたものである。昔の武士などは一般に自尊心に富み、大いに面目を重んじたので、かりにもこれを傷つけるやうな他人の言行に對しては、少しもようしやせず、場合によつては命にかけても争つたものである。萬一他人から侮辱を受けても恥かしいと思はぬやうなものがあつたら、世間ではこれを腰拔こしひ武士と呼んで、ひどくけいべつしたものである。

侮辱の一語

今日、西洋のいはゆる紳士がその面目を重んずること

は、ちやうど我が國の昔の武士の風習に似てゐる。彼等は自分に加へられた侮辱に對しては、たとひそれが輕微なことであつても、決してそのまゝ棄ててはおかぬ。西洋では、侮辱といふ一語は、聽く人の耳に一種特別な強い感じを與へる響ひびきをもつてゐる。そして、これがその社交において一般に禮儀を尊び、最も言動を慎重にする習慣を作り、ひいては一國の風俗を健全にする原因となつてゐるやうである。

多數の人が廉恥の心に富み、その上、自重して大いに面目を重んずると、たとひ破廉恥な行をして法網をくゞるものがあつても、社會は嚴重にこれを道徳的に制裁する

社會的制裁

から、一國の風紀を維持することができるところが、我が國では不幸にも今の人は多くたゞ名利を重んずるところから、昔の美風は次第に衰へようとする傾向が見える。我等はこの點について大いに反省せねばならぬ。

八 勇氣

勇は達徳の一

勇氣とは意志の強いことで、何事を實行するのにも缺くことができぬものである。だから、孔子も「知仁勇の三つは天下の達徳なり。」といつて、勇氣を重んじた。善事といふ善事は悉く知仁勇にその基礎をおき、しかもこの三者が一樣に揃はないと、善事も眞の善事とはならぬ。知

者でも、仁者でも、同時に勇者でない、事實上知者となり
 仁者となることはできぬ。心に事の是非を知つても、た
 だ知るだけでは、その知は何の用もなさぬ。心に物のあ
 はれを感じても、たゞ感ずるだけでは、その仁もまた何の
 役にも立たぬ。知と仁の作用を全うするものは實に勇
 である、詳しくいふと、知と仁を實行する勇氣である。

猪勇・蠻勇

勇氣はおもに身體の動作にあらはれるし、また昔から
 の勇者も多くは戦士だつたから、これをたゞ身體的勢力
 と誤解するものが少くない。身體的勢力も勇氣でない
 とはいへぬが、これには往々知と仁が伴はぬから、猪勇蠻
 勇などのやうないはゆる血氣の勇になりやすい。血氣

眞の勇氣

の勇は道德觀念と一致するとかぎらぬばかりでなく、一
 時敵に對して起つて、敵がなくなると衰へてしまふもの
 だから、眞の勇氣とはいへぬ。眞の勇氣は敵の有無にか
 かはらず、平生でも心の底に漲り、その上、道德觀念のさし
 づに従つて動く強健な意志でなければならぬ。

武事、特に戦争に勇氣を要することは誰でも知つてゐ
 るが、この場合でも、その勇氣はほんたうの勇氣でなけれ
 ばならぬ。猪勇蠻勇では、たとひ一時は成功しても、最後
 の勝利を得ることはむづかしい。とりわけ今日のやう
 に盛に科學を應用する戦争では、一騎打を主とした昔の
 戦争に必要なだつた猪勇蠻勇はあまり用をなさぬ。今日

文事にも勇氣

の戦争で結局の勝利を得るものは、必ず知仁勇兼備の軍隊である。

文事にもまた勇氣を要することは、武事と少しも變りがない。武勇に對して文弱といふことがあるけれども、これは文事に伴ふ餘弊をいつたまでで、文事は勇氣がなくともできるといふ意味ではない。學問を始め各種平和の事業にも勇氣を要することは、學者としてまたは政治家・實業家などとして大事業をなし、一世の尊敬を受けてゐる古今著名の人物を見ると、すぐわかるだらう。こんな人はたいてい平生勇猛の工夫を用ひ、内外多くの困難とたゞかひ、失敗にたわまず、迫害に屈せず、遂にこれに

血氣の勇

勇氣の最善の部分
は思慮である。
(シエイクスピア、イギリスの大文豪)

打克つて、その目的を達したほんたうの勇者である。

青年の特色の一つは理想の純潔なことである。彼等の勇氣はその純潔な理想に刺戟されて起ることが少くない。老成な人がどうかすると名利のために勇氣を起すのにくらべると、その動機には大いに尊いところがある。しかし、その思慮がまだ十分熟しないから、往々血氣の勇に逸はることを免れぬ。だから、青年はとりわけ勇氣について修養する必要がある。血氣の勇でも勇のないにはまさるから、強ひてこれを抑へつけるのはよくない。これをうまく導いて、道德觀念と一致するほんたうの勇氣にせねばならぬ。

勇氣の養成

勇怯は人の生れつきだから、これはどうすることも出来ぬと思ふのは誤である。戦争の時に、臆病な兵士でも、これを暫時砲壘の前に出して、敵の射撃に向はせておくと、多くは間もなく打つて變つた勇者になるさうである。こんなには、危険をおかして見る事などによつても、勇氣は相當に養はれるものだが、しかし、その根本的の養成法はやはり道德的修養である。ほんたうの勇氣は自ら省みて良心に對してやましくない場合にだけ生ずるものである。孟子が、自ら反みて縮からば、千萬人といへども吾は往かん。といつたのは、即ちこのことである。だから、我等もほんたうの勇者にならうと思ふなら、まづおも

道德的修養

に道德的修養に努めねばならぬ。

九 注意が大切

注意は物事に氣をつけ心をとめる心の働で、勉學修養にはいふまでもなく、何事をするのにも極めて必要である。注意が缺けてゐると、どんなよい見聞でも心に留まらず、空しく過ぎ去つてしまふ。注意はたとへば夜行にたづさへる提燈のやうなもので、提燈があるので暗がりでも種々の物を見ることが出来るやうに、注意を怠らなると、人の氣づかぬことにまで氣づいて、意外な利益を得るものである。知徳の發達や事業の成功なども、その人

注意の必要

夜行の提燈

注意と努力

の注意の有無・多少に關係することが少くない。
 注意は人の生れつきによつてその廣狹・深淺にかなり
 差異があるけれども、また努力によつてその力を増すこ
 とができる。好き嫌ひにかゝはらず、せひ學ばねばなら
 ぬことは、十分注意して何度もこれをくりかへすと、やが
 て一種の習慣となつて、遂にはわざ／＼心を用ひないで
 も、自然に注意することができるやうになる。學習上に
 最も効果のあるのはこの種の注意である。わざ／＼心
 を用ひないでも自然に注意することができるやうにな
 ると、まことに都合がよいけれども、さうなるのにはよほ
 ど努力を積み重ねねばならぬ。もつとも、中には、強い刺戟、た

効果のない注

意と成績

とへば、非常に珍しい形や激しい音などに對して自然に
 起る注意もあるが、これはその場かぎりにとゞまつて、學
 習上にはあまり用をなさぬばかりでなく、却つてこれを
 妨げることがある。そのわけは、あのちよつとした物音
 にも氣を散らす人の例でわからう。
 同じ物事の見聞でも、注意のしやうによつてその効果
 に差異が生ずる。注意の深い人は、心で見、心で聽くから、
 これをたゞ目で見、耳で聽く注意の淺い人にくらべると、
 その知識を得ることの多く且たしかなことは、もとより
 いふまでもない。同じ教場で同じ教授を受けても、人によつて成績に優劣の差を生ずるのは、注意の深淺による

注意の有益無益

ことが多い。

また、注意は心から起るものだから、平生の心がけ如何によつて、これを有益にも無益にもするものである。たとへば、人にあつても、たゞその悪いくせばかりに氣がつくのは、平生から人の缺點をさがすことの好きな人である。こんな注意はあまり有益ではない。修養に志すものは、平生よく自分の注意が何に向ふかを省みるがよい。間斷のないよい注意は、ちやうど磁石が鐵片を引寄せるとやうに、どこからでも知徳の材料を見つけ出して來るものである。だから、注意は學業の進歩にはもちろん、人格の完成にもせひなくてはならぬ人の根本能力といふべきである。

人格の完成と注意

失策の多い場合

きである。

一〇 油斷大敵

得るは難く、失ふは易い

人の失策は、事の困難な場合よりも、却つてその容易な場合に多く生ずる。車の怪我が上り坂に少くて下り坂に多いのはその一例である。これは、困難なことをする場合には、心が引きしまつて、十分に思慮をめぐらすのに反して、何でもないと思ふ一念が生ずると、心がゆるんで注意を怠るからである。諺に「油斷大敵」といふのは、こんなことを戒めたのである。

安心から油斷

我等が始めて學校に入つた當座は、心も自然緊張してゐて、その日々の課業を勵むけれども、一度試験によい成績でも得て、これなら大丈夫と思ふやうになると、そろそろ安心して、勉強も怠りがちになり、甚しきはその品行までも悪くするやうになる。これもまた油斷の結果だから、油斷は實に我等の大敵である。

事に關する油斷

仕事をするのには、その難易に應じてそれ相當の力をつくせばよい。必ずしもいつも大事を取るには及ばぬけれども、人はとかくむつかしいことでも、たやすく見失ふ傾があるから、どちらかといふと、自分で十分できると思ふことでも、これを十二分にでかす心がけて事に

荀子にある語

當るがよい。古語に、「百事の成るは必ずこれを敬するにあり、その敗るは必ずこれを慢るにあり」とあるのは、いかに名言である。初から心に油斷があつて事を企てると、たとひそれが容易なことであつても、失敗が多く伴ふのは當然である。

人に對する油斷

油斷は事に關してよりも、人に對して更に一そう悪い結果をもたらすものである。仕事の難易はその事に當るとすぐわかるけれども、人の心は元來測り知りにくいもので、中には表面から見るとは甚しく心のちがふ人もある。これは必ずしも悪い人に限らず、善い人にもずるぶん見られることである。たとへば、偉さうな顔をし

てゐないから無能な人かと思ふと、その實は、諺に「能ある鷹は爪をかくす」といふやうになか／＼りつぱな人が謙遜してゐるといふやうなことが、世間にはよくある。もしこんな人をつまらぬものと思つたら、意外な失策をして恥をかゝねばならぬ。またうまく人の心を迎へてその氣に入るやうなことばかりいふ人は、誰しも親しみ易いと思ふけれども、こんな人に心を許すと、後になつて悔いることが多い。だから、こんな場合にも、我等はよく油斷大敵の戒を忘れぬやうにせねばならぬ。

元來得ることは難く、失ふことは易い。全身の力を用ひてあげた重荷でも、これをはふるのには何の苦もない

得るは難く失ふは易い

やうに、多年の努力の結果で成功した千萬長者でも、一旦心がおごり運が傾くと、たちまち無一物になつてしまふ。あつぱれの秀才も、一時の心得ちがひから、十年螢雪の功を空しうすることがある。世に誘惑の悪魔はいくらもようとも、自分だけは大丈夫だと思ふ心が、すでに油斷をしてゐるのである。

そも／＼人生の行路は極めて險阻であつて平地がなく、いつになつても絶対の安心を許さぬものだから、もしこゝは平坦だと思ふやうなことがあつたら、それは心に油斷が生じ、必ず多少の失策がこれに伴ふと心得て、一そう警戒をきびしくせねばならぬ。

絶対の安心を許さぬ

明治天皇御製
事なしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよしりも危かりけ

勤勞の意味

こゝにいふ勤勞とは、身體と精神の兩者を同時に働かして、學を勉め業を勵むことであつて、たゞ精神ばかりでする勉強や、おもに身體ばかりでする勞働とは異なるものをいふ。

勤勞と生命

勤勞は我等の一日も缺くことのできぬもので、我等の生命を保つてゆくにも必要である。すべて身體も精神も働くことによつて發達するから、働かさな部分^は次第に衰へて、その用をなさぬやうになる。人が何事もせず安逸にその日を送ると、まづ「無事の苦み。」といふ一種の苦痛を感じ、次にはだん／＼衰弱するものである。こ

無事の苦み⁽¹⁾

學問と勤勞

んなに、人は勤勞によつて強くなり、安逸によつて弱くなるものだから、勤勞を厭うて安逸を希^{こひねが}ふのは、實はちやうど生を棄てて死を取らうとするやうなものである。

これまで學問は頭の仕事であると思はれてゐたが、今日の學問は勤勞が伴はないと十分に修めることができぬ。多くの書物を讀む外に、實驗もし、觀察もし、または學んだことを口にしたたり筆にしたたり、またその上に、實地にこれを畫いたり造つたりして見ないと、果してそれが確實に自分の物となつてゐるか否かがわからぬ。つまり學問は心身をともし働かさないと、十分に理解し自在に應用することができぬものである。

勤勞と人格

道德上の教訓もこれを實行にあらはさないとならぬ。とりわけ人格はおもに實際生活の試煉を経て始めて完成されるものだから、これにもまた大いに勤勞が必要である。

人の生活に極めて大切で且根本となるものは元氣である。精力といひ根氣といふのも、多くは元氣の異名で、勇氣もまた元氣から出て来るものである。そして、元氣はおもに勤勞によつて養成される。即ち勤勞すると心身が練磨されて、元氣が旺盛になるものである。だから、他日實際の事業の上で大いに活動を試みようと思ふものは、今から十分に勤勞を好む習慣を養つておかねばな

元氣と勤勞

立身の意氣、
興國の氣象

習慣の養成

らぬ。ところが、我が國民はとかく勤勞を厭ひ、中には勤勞すると品位を傷つけると思ふものさへある。こんな思想の誤つてゐることは改めていふまでもない。今日現に國運の隆昌を極めてゐる文明諸國では、國民はその身分の如何にかゝはらず、皆勤勞を好んで元氣よく働いてゐる。勤勞は實に立身の意氣、興國の氣象ともいふべきだから、我等は大いにこれを尊重せねばならぬ。

一二 習慣

「習慣は第二の天性」と西洋の諺にもいふやうに、習慣が我等の人となりになり及ぼす力は極めて大きい。我等が生

少成は天性の如く、習慣は自然の如し。
(孔子家語)

他力的習慣

れつきだと思つてゐるもので、その實は習慣に外ならぬものが少くない。だから、習慣の養成については最もよく氣をつけねばならぬ。

習慣は自力でもできるけれども、また他力の影響を受けてもできる。音樂の名人が久しい間用ひたヴァイオリンは、いつの間にかその胴の纖維の組織に微妙な變化を起して、下手な音樂家が弾いても美しい音を出すさうである。これと同じく、人も長い間善い人と親密に交ると、その感化によつてりつぱな習慣ができる。これと反對に、悪い人と交ると、自然にまた悪い習慣ができるのは、ちやうどヴァイオリンが下手な音樂家に弄もてあそばれてまづ

自力的習慣

いものになつてしまふやうなものである。

しかし、他人の感化はもちろん、すべて家庭その他周囲の影響のやうな他力でできた習慣は、他力の影響がなくなるとまた動搖するものだから、習慣は更に自力を加へてこれを作り出さねばならぬ。そして、自力で習慣を作るのには、己に克ち慾を制して、良心の敵とたゞかふ勇氣が必要である。また一旦善い習慣ができた後でも、常にそれが何故に善いかを自覺してゐなければならぬ。この自覺が伴はないと、たとひ善い習慣でも遂には生命のない形式となつて、融ゆう通つうがきかず、またその發達もそれきり止まつてしまふものである。

身體的習慣

習慣には身體的のものと精神的のものとがある。労働者などが一定の仕事を精確にしてしまつて、しかも格別疲勞を覺えぬやうなのは、身體的習慣によるもので、我等の日常の坐作・應對・寢食なども、多くはこの種の習慣に屬するものである。

精神的習慣

我等が物事に對する場合に、人によつてその見方にいろいろの差があるのは、生れつきによる外は、精神的習慣に原因することが多い。たとへば、同じ一つの古器物に對してでも、科學者はこれを研究しようとし、藝術家はこれを鑑賞しようとするのは、兩者の心が平生からこんな

論語にある語

善い習慣

後漢書にある語

子は義に喩り、小人は利に喩る。といふのも、つまり君子・小人の平生の心得がちがふからである。

勉強でも勤勞でも習慣になると、別に苦痛を感ぜずにも習慣になると、特に意を用ひないでも、ちやんとりつぱにできるから、古人が「善をなすこと最も樂し。」といつたやうな味でも、我等に味はれるやうになる。だから、早くからこんな善い習慣のできてゐる人こそ、實にしあはせものだといつてよい。

悪い習慣

しかし、善い習慣が我等を益することの極めて大きいやうに、また悪い習慣は我等を害することが甚しい。不

明治天皇御製
積りなげ拂ふ
方なくなりぬ
べし塵ばかり
なることと思
へど

初をつしめ

作法不紀律はもろん、懶惰盜癖虚言などの悪徳も、多くは人が最初何心なく作つた悪い習慣から生ずるものである。だから、習慣は我等の有りがたい味方であると同時に、また恐ろしい道づれであることを知らねばならぬ。善い習慣を作るのには、その初をつしむことが最も大切である。初にはこれを矯めるのにそんなに困難ではないことでも、それが習慣となると、もはやどうともすることができぬやうになるものである。だから、我等は悪いと氣づいたことは、そくぎにこれを改めるやうに心がけねばならぬ。いづれそのうちにといふやうな心がけであるては、善い習慣を自分で作ることはむづかしい。

一 環境を善くす。
二 克己自利
三 初をつしむ
四 積りなげ拂ふ
五 方なくなりぬべし塵ばかりなることと思へど
六 初をつしめ
七 善い習慣を作るのには、その初をつしむことが最も大切である。
八 初にはこれを矯めるのにそんなに困難ではないことでも、それが習慣となると、もはやどうともすることができぬやうになるものである。
九 だから、我等は悪いと氣づいたことは、そくぎにこれを改めるやうに心がけねばならぬ。
一〇 いづれそのうちにといふやうな心がけであるては、善い習慣を自分で作ることはむづかしい。

中庸と適度

程子の解説

適度を守る困難

一三 中庸

孔子は「過ぎたるはなほ及ばざるが如し」といつて、中庸の極めて大切なことを説いた。後の學者の説明によると、「偏せざるこれを中といひ、易らざるこれを庸といふ」とあるから、つまり中庸とは何事にも適度を守ることをいふのである。

適度を守ることは何事にも必要だが、またこれほど言ふことの易くて行ふことの難いものはない。試に自分の心や行について考へて見たら、それがたやすくわからう。何か物がほしくなるかと思ふと、間もなくそれがいやになる。嬉しいと感じる後から、またすぐ悲しいと感

要 適度を守る必

學を教ふるは
醉人を扶くる
如く、東に
扶け得れば、
西に倒るま
た、宋の
學者

じる。非常な勢で勉強するかと思ふと、たちまち遊にふ
けつて我を忘れてしまふ。ちやうど揺られた振子が容
易に振幅の中點に止まらぬやうに、我等の心はたえず動
揺して、極端から極端に馳せてゐる。

ところが、我等の心が一度甚しく一方に傾くと、もとの
位置に復することはなかく、むつかしい。たとへば、遊
にふけつても、やがてその度を過したことに氣づいて勉
強に取りかゝると、そんなに害はないが、全く遊に凝つて
しまふと、ちやうど沈んだ船が容易に浮ばぬやうに、これ
を救ふことはよほど困難である。また適度を守らない
と、たとひ善いことでも悪い結果を生ずることが少くな

適度と修身・
處世

昭憲皇太后御歌
花の春もみち
の秋の益もほ
どほどにこそ
酌まほしけれ
徳は兩不徳の
中間にあるの
(アリストトー
トル、ヤリ
シヤの哲學
者)

い。たとへば、日常缺くことのできぬ寢食でも、これを適
度にしないと却つて健康を害し、また人のためにする親
切でも、その度が過ぎると却つて仇になるやうなのがそ
れである。

だから、我等は修身及び處世上、どの方面でもよく適度
を守ることを忘れてはならぬ。たとへば、人と應對する
のに、言葉のあまり多いのも、またあまり少ないのもよくな
い。氣位は高いのがよいが、高慢になつてはならぬ。清
潔は好んでも、潔癖に陥つてはならぬ。正直にも思慮が
伴はないと、愚直になることを知らねばならぬ。率直無
邪氣もその度をこえて、粗野無禮に流れてはならぬ。ふ

まづ一とほり
を行へ

漢書にある語

だんの着物は質素なほどがよいけれども、儀式の場合には相當な身形みなりをせねばならぬ。その他、すべて時と場合に應じて、まどく／＼にせよ。といふ諺のとほりにすることは、即ち適度を守るのに最も必要な心がけてある。

こんなになに、適度を守つて中庸に合ふ行をすることはすこぶる大切だが、その實行はなか／＼容易でない。およそ世に知り易さうで知り難いものは物事の適度である。古語に、「その出づると出でざるとの間には髪を容れず」とあるとほり、一口に過不及といつても、はつきりとその境目を定めることはほとんどできぬ。それなればこそ、孔子も中庸は一とほりは誰にでも行へるが、これを十分に

禮は中あたるを尊ぶ、中るとは過不及なきをいふ。
(貞原益軒)
中庸と禮儀作法

流行と風俗・習慣

行ふことは聖人にできへむつかしいと説いたのである。しかし、平生よく心の動搖を制し、またよく禮儀作法に従つて身の行を正すと、たとひ十分なことはできぬまでも、甚しく中庸に遠ざかることはないものである。

一四 流行に迷ふな

世間の流行には善いこともあれば悪いこともあるから、流行を追ふのを一がいに悪事として排斥すべきではない。現在の風俗習慣も多くはもと流行であつたものが次第に固定してできたものであるやうに、今日の流行でも、その善いものは必ずのこつて將來の風俗習慣とな

流行に反し得ない場合

るだらう。一たい人は流行を追ふまいと思つても、多少はこれを追はずにはゐられぬものである。たとへば、流行しない物はこれを買はうとしても容易に手に入らぬから、いやでも流行の物を用ひる外はない。またたとひこれを買ふことができるとしても、物によつては案外高價について、却つて不利益になることがある。手織の綿服は昔は質素な着物だったが、今日ではよほど高價を拂はねば手に入れることがむづかしい。こんな事情もあるから、たゞ一がいに流行を追ふのは悪いとばかりはいへぬ。

流行の力

悪い流行を追ふのはもちろんよくないが、しかし、實際

文化の進歩と流行

には、悪い流行とは果してどんなものを指すかを知ることとは容易でない。初め或新しい物が流行し出した時には強い反感をいだいた人が、間もなく自分でも平氣でこれに従ふやうになる。今日では人が當然のことに思つてゐる東西諸國の風俗習慣でも、一時は世人の反感を招いた歴史をもつてゐるものが多い。流行はいつのまにか人の心持を變へる強い力をもつてゐる。

それなら、流行に對しては道理は全く勢力がないかといふと、決してさうではない。文化の進歩とともに、流行もあまり道理を無視することができぬやうになる。今日の文明諸國では、もはや野蠻未開の社會に見るやうな

趣味に關する
流行

甚しい不合理な風俗習慣は行はれなくなつて、すべてが衛生的・經濟的及び道徳的になつて來た。

こんな大體に於ては、文化の進歩とともに流行も次第に道理に合ふやうになる傾はあるが、それでもまだ多くの弊害がこれに伴つてゐる。とりわけ趣味に關する流行には不合理なものが多い。元來人の趣味は一がいに衛生論や經濟論などで左右することができぬから、趣味に關する流行には、昔からどの國でも多少の弊害が看過されてゐる。しかし、あの奢侈贅澤の風などはおもにこの隙すきに乗じて起るばかりでなく、趣味の流行には往々俗悪野卑なものがあつて、知らず識らずの間に、人の品位

學生と流行

を傷つけ徳性を損ふから、我等はこの點についてはとりわけきびしい批判を加へて、その取捨を誤らぬやうにせねばならぬ。

學校の生徒は専心學業を勵まねばならぬ身分だから、絶えず變化する世間の流行に心を奪はれるやうでは、とても落ちついて修業することはできぬ。西洋の諺に、「外面の流行は即ち内面の流行」とあるとほり、外形の變るたびに内心もまた變ることを免れぬから、流行の身形みなりをするぐらゐは何でもないと思つてゐる間に、いつしかその精神までが悪い影響を受けることがある。そして、あまりに流行を追ふと、いつも心が動いて、そのために自然に

最も戒めるべきはその心

明治天皇御製
ともすれば浮
きたち易き世
の人の心の塵
をいかにしづ
めん

人格の成立をも妨げられるものである。
しかし、元來我等が最も戒めねばならぬものは、流行を追ふ行よりも、むしろその本となるところのこれを追ふ心である。好んで流行を追ふ心はいはゆる移り氣で、これがとかく人を輕佻浮薄にする。とりわけ今日は善くない思想の流行が盛だから、流行に對しては、我等は一そ
う心がけを慎重にせねばならぬ。

△ 一五 読む物、見る物、見る物

小説の利害

教科書外の讀物

教科書の外にもいろいろよい讀物があるから、課業の

アメリカ合衆國の文豪

課外讀物

妨とならぬ限りはこれを讀むがよい。これをよく讀むと、教科書の助になり、また教科書にない事がらをも覺えるから、知識を増し、修身上の利益を受けることができる。たゞし、これを選ぶについては、その方法を誤らぬやうにせねばならぬ。たゞおもしろいからといふので何でも讀むのはよくない。なるたけ何かためになる讀物を選ばねばならぬ。エマーソンの讀書心得に、「出版後まだ一年にならぬ書物はこれを讀まぬがよい」とあるのは、今日のやうに出版物の殆ど無限に世にあらはれる時代には、讀物の選擇上最もよい注意である。
よい讀物と見るべきものは、まづ教科書と關係のある

新聞・雑誌と
小説

ものである。その外、一般に課外讀物として學校から示されてゐるものは、いふまでもなくよい讀物である。新聞や雑誌の中には、かなり青年に不適當なものもあるから、十分氣をつけて擇ばねばならぬ。小説は概して讀んでおもしろいけれども、往々修身上の害になるものがあるから、これを讀むについては、最もよく氣をつけねばならぬ。

修身と小説

修身は正しい心や善い行のどんなものであるかといふことを説いて、我等が悪を避け善に就くするには、どんなにその心を用ひ、またどんなにその身を處せねばならぬかを教へるものである。ところが、小説はこんな道徳的

小説の害

教訓を主とするものではないから、たゞ正しい心や善い行ばかりをとらずに、人をありのままにゑがき出すものである。従つてその中には、人の悪い心やみにくい行も遠慮なく暴露されることが多い。だから、我等は小説によつて世態人情を學ぶことはできるが、道徳上には往々悪い感化を受けることを免れぬ。

善を知り善を愛し善を行ふことが修養の目的だから、修養を主とする青年期には、なるたけ惡に遠ざかり善に親しむやうに心がけねばならぬ。小説によつてあまり人生の暗い方面をうかゞふと、我等の心までそれに引入れられる恐がある。孔子は、禮にあらざれば視ること勿

れ、禮にあらざれば聴くこと勿れ、禮にあらざれば動くこと勿れ。」と教へた。これは悪を悪として嫌ふやうになるのには、まづ善によつてその心を固めておかねばならぬから、平生なるべく悪いことに近寄らぬやうにせよとの意味である。

また小説には多く實際とかけはなれた想像を書いてあるから、これをそのまゝ信じて世の中を見ると、不平不満に堪へぬことばかりである。その上、作者によつては、なるだけ読者の心を捉へようとして、過度にその想像や感情を刺戟しようとするものがあるから、こんな小説に読みふけると、意志の力が弱くなつて、勤勉努力を厭ひ、物

實際との衝突

事を冷靜に考へることができなくなる。我等は元氣の盛な青年期に於て、他日のために大いに勉強せねばならぬのに、この大切な元氣を何にもならぬ讀書によつて磨りへらすやうでは、將來の成功はおぼつかない。

たゞし、思想が健全で青年に適する小説は、閑暇の時にこれを讀むのはさしつかへがない。また深遠な思想を含む大家の小説は、その眞意を玩味するのに相當な學識と經驗を要するから、これらは年が長じて後に讀むがよい。たゞ絶対に讀んでならぬのは、その思想が俗悪でその上危険な小説である。

また見るものについては博物館展覽會などで、とりわ

よい小説

人の心の奥に
光を送るの役目
がある。藝術家の
（シ）ニューマン、
ドイツの音
樂家）

活動寫眞

け教育の目的をもつてゐるものは自分から進んでも見
 るがよいが、近年ますます盛になる活動寫眞はたいがい
 娛樂本位で、俗悪卑猥な小説を眼で見るやうな映畫も少
 くなく、その上、建物の衛生的設備にも缺點が多く、これは
 とりわけ年少者には有害無益だから、なるたけ避けるが
 よい。西洋諸國でも深くその弊害をさとつて、すでに父
 兄の同伴のない年少者の活動寫眞館入りを法律で禁じ
 てゐるところもある。たゞし、これにも、小説の場合と同
 じく、そのよいものについては除外例のあることはいふ
 までもない。

1100

一六 禮儀作法

家族といはず、社會といはず、すべての集團生活には禮
 儀作法が必要である。禮儀作法がないと、集團生活は圓
 満に行はれぬ。禮儀作法は相互の交際上すべての人の
 守るべき言語動作に關する一定の形式である。すべて
 の人が心のまゝに勝手に振舞ふと、互に衝突して、自他と
 もに不快を感じ不利益を受けるから、集團生活ではよく
 紀律を守らねばならぬ。しかし、紀律の目的はおもに人
 と人の衝突を避けて、その團結を破らぬやうにするのに
 あるから、さらにこれを圓滿愉快にするのには、その上な
 ほ禮儀作法を重んずることが必要である。

我等は父母に對し、先生に對し、また朋友その他に對して、その位置身分に應じて、相當の禮儀作法を守らねばならぬ。禮儀作法が守られてこそ、始めて親子・師弟・朋友その他の關係もよく保たれ、また相互の親愛も永くかはらぬのである。親子の間でも、あまりなれ／＼しく無遠慮になると、往々不和を生ずることがある。まして師弟・朋友の間では、禮儀作法をゆるかせにすると、たうていその間を圓滿にすることは望まれぬ。とりわけ今日のやうに、誰でも始終家を出て廣く世人と交らねばならぬ時代では、我等は一そうよく禮儀作法に注意せねばならぬ。

ところが、青年の間には、天真爛漫らんまんなどと稱して、思ふま

まのことをいつたりしたりして、人の迷惑を考へぬものがある。天真爛漫とは、わざと表面を飾つて人を欺くやうなことをせず、正直に自分をあらはすまでのこととて、これがために禮儀作法までも無視してよいといふのではない。だから、誤つてこんな天真爛漫の振舞をすると、必ず相手の不快を買つて、遂には世人に忌みきはれるやうになる。

禮儀と作法は合して禮といふ一つの意味をなすが、實際上においてはこれを區別することができる。禮儀は冠婚葬祭の儀式のやうなもので、その最も大きなものになると、人に對してばかりでなく、神佛に對しても行はれ

禮儀・作法の本は人の心

るものである。こんな儀式は單に實用だけを主とするものではないから、時間や經費の都合だけを考へずになるたけその歴史的・道徳的・宗教的意味を重んじて行ふがよい。これに反して、作法はおもに日常生活にあらはれて交際上自他の便利をはかることを目的とするものだから、實用に重きをおかねばならぬ。従つて作法には我等の生活状態の變化とともに改めるべきものが多い。禮儀といひ作法といつても、どれもその本は人の心にあるから、その本を忘れず、にできるだけこれを形式の上にあらはすことをつとめねばならぬ。心のあらはれぬ禮儀作法はいはゆる虚禮虚儀で、人に好感を與へぬばか

孝經にある語
その人の自然
の表現である
そのやうに
練習された作
法には、
効果がない。
（ハイ
ン）

誰も同じ人

りでなく、却つて集團生活の健全な發達を妨げる。古語に、禮は敬のみ。」とあるとほり、禮儀作法の本は恭敬の心である。己を恭（こま）しうして人を敬する心を本とする禮儀作法であつてこそ、始めてよく交際を圓滿にしようとする目的を達することができるのである。

一七 尊敬しあひ譲りあへ

およそ人には身分・財産などによる差別はいろ／＼あるけれども、人であるといふ點では皆同じである。その上、どんな人でも必ず何かの長所をもつてゐるから、よくその長所を認めて、互にこれを利用しあふばかりでなく、

また互に尊敬しあはねばならぬ。自分を侮るのはよくないが、人を侮るのはなほさらよくない。自分が人を侮ると、人もまた自分を侮るやうになるのと同じく、自分の人に對する尊敬は、やがて人の自分に對する尊敬となつて報いられるものである。社會の秩序の亂れる原因は種々あるけれども、人が互に尊敬しあふ念を缺くことがその最もおもなものである。互に尊敬しあふ念を缺くのは、その心に誰でも同じく人だといふ根本の觀念が明かでないからである。

今日は、家の内外到るところで、職業も思想も違ふいろいろな階級の人が頻繁ひんぱんに交際して、その關係がすこぶる

互敬の精神

階級の間の憎惡

複雑になつてゐるから、いつ、どこで、人に不快を與へて怨を買つてゐるかわからぬ。だから、各自互に禮儀作法に注意することがます／＼必要である。しかも禮儀作法はたゞ表面的な世辭の交換をするだけのものではなく、互に尊敬しあふ精神を本とするものであつて、單に目上の人に對してばかりでなく、目下のものに對してもまたこの精神を失つてはならぬ。

たとひ一部にでも、自分の身分を誇つて人を人とも思はぬ氣風があると、社會の交際はなめらかに行はれぬばかりでなく、これがため階級の間の憎惡ぞうおがはげしくなる。スマイルスは、紳士はいちじるしく自分を尊敬すると同

時に、同じ筆法で他人を尊敬するものである。」といったが、こゝに「他人を尊敬する。」といふのは、相手が紳士である場合に限ることではなく、紳士であらうとあるまいと、たゞ相手を同じ人として尊敬するといふ意味である。たとひ別に取るに足る長所のないやうな人にて、諺に「一寸の蟲にも五分の魂。」といふとほり、多少の自重心はあるものだから、もしこれを傷つけたら、必ずその反感を買つて敵を作ること免れぬ。ところが、スマイルズのいつたやうな紳士の精神が一般に普及すると、禮儀作法も心から行はれて、交際上で侮辱されたと感ずる人も自然に少くなるから、階級の間の憎悪も大いに緩和されるものである。

ある。

互に尊敬しあふ念には、必ず互に譲りあふ念が伴ふものである。彼も我と同じく人だといふ考があると、誰でも人に對してわがまゝな振舞などをしないばかりでなく、何事についても譲られるだけは喜んで譲るやうになる。往來を歩いては路を人に譲り、電車に乗つては席を人に譲り、また場合によつては、利益や名譽までもこれを人に譲るといふ心がけが一般の人にあると、あの見苦しい喧嘩口論などは、自然に世にその跡を絶つやうになる。我等が日々多少の不快を感じるのは、多くは人と人の間に衝突があつて、互に相争はうとする心が起るから

である。だから、我等の心に初から互に譲りあふ念がよ
く養はれてゐると、つまらぬ争に心を苦しめることができな
いから、我等は互に快くその日くを送ることができ
イギリス人は、人に足を踏まれた場合でさへ、ごめんなさ
い。」と挨拶するほどに、幼少の時から互に譲りあふ美德を
養はれてゐる。ところが、我等はこんな場合に何といふ
のが常だらうか。我等は大いにイギリス人にかんがみ
ねばならぬ。人が互に十分尊敬しあひ譲りあふやうに
なると、一國の風俗も高尚堅實になり、従つて社會の秩序
も安全に保たれるに相違ない。

隠れた善と隠
れた悪

孔子の門人

一八 悪よりも善を

人に知らせるのは

世の中には、隠れた善もあれば隠れた悪もある。隠れ
た善をあらはすことは、その人のためにもなつてよいこ
とだけれども、隠れた悪をあばくことは、その人のために
ならぬばかりか、時としては世人に悪を教へることにな
る。その上、あまりきびしく人の過をとがめると、せつか
く自分で悔い改めようと思つてゐる人をして、却つて悪
に逆戻りさせるものである。それなればこそ、子貢は「評
いて以て直しとなすものを悪む」といひ、孔子もまた「父は
子のために隠し、子は父のために隠す、直きことその中に

あり。」と説いたのである。こんなに、場合によつては、わざと人の悪を隠すことが却つて情理にかなふものである。だから、隠れた悪をあばくのは、これをそのまま打棄てておく、と世の中のためにならぬと思ふ場合だけに限るがよい。

今日の文明國民は、皆その交際において、人の私行を口にするのを堅く戒めてゐる。私行は讀んで字のとほり人の内密の行であつて、人はたゞこれを噂うはせに聞くのに過ぎぬ。眞偽をたしかめず、たゞ噂に聞いただけで人を是非するのは悪徳である。その上、人の悪口をいふ人は必ずまた自分の悪口をいふ人だらうといふことを思ふ

人の私行を口にするな

と、誰でもこんな人には心を許すまい。しかも、人の悪いことをいひふらすのは、ちやうど人の嫌ふ汚物を擔かぎまはるやうなものだから、その人自身もやがてきたないものとして世人にいやがられるやうになる。

これに反して、人の隠れた善をあらはすことは、その仕事つとがきれいである。たとへば、水底から砂金の粒つぶでもすくひあげるやうなもので、たとひその當を得ないでも、社會に甚しい損害を與へることが少いので、昔は偽孝でさへもこれを褒賞して、孝道を獎勵したといふほどである。互に悪をあばきあふことが一般の風になると、社會の人氣を悪くするけれども、人々がなるたけ他人の善いこと

顯善の美風

曾子の語

を聞いて喜ぶやうになると、各自が善行を勵み、その上、世の中が一體に明るくなる。昔から、人の過を説かず、人の美を成す。といふことを人の美德としてゐるのは、實にこれがためである。

ところが、人には利己心や競争心があつて、人の利益よりも自分の利益を先にし、人を押しつけても自分を優勝者にしようとするので、とかく人の善よりもむしろ好んでその悪をあばかうとするものが多い。そこで、これを嫌つた松尾芭蕉は、人の短をいふことなかれ。己が長を説くことなかれ。と書いて、これを座右の銘とし、常に自ら警めた。彼が今日でも人格思想ともに極めて高い俳人

芭蕉の座右銘

これはもと
は(ま)玉と
いふ支那の古
い學者の語を
學んだもの。

中の聖とまでいはれるのは、こんな平生の心がけによることだらう。

△一九 公德

公衆道德

道德の本は一箇の善だから、これを公と私に區別すべきではない。しかし、道德を實行する場合には、相手が個人であるかまたは公衆であるかによつて、多少その心得を異にせねばならぬから、この點に於て便宜上公德と私徳を區別するのである。たとへば、家庭に於ては遠慮するに及ばぬことでも、社會に出てはこれを慎まねばなら

公德私徳の區別は便宜上のこと

公德心
私徳心

遠慮心

慎み心

遠慮心

ぬことが少くない。今日は、我等の生活は次第に家庭から社會に延びて、他人と關係する機會が多くなつたから、我等は家庭の私人としての外、また社會の公人として別にその心得を學ばねばならぬ。

社會では相手が一般公衆で、誰某たれがしときまつてをらず、一面識もない多くの人と交際するから、禮儀作法はたゞ知つてゐる人に對して守ればよいと思ふと、意外な失敗を招くことがある。また社會生活は忙しく、その上こみいつてゐて、相手の心の底までも一々せんぎしてゐられぬから、こゝでおもに問題になるのはたゞ表面の行である。まづ人に迷惑をかけぬ行なら、とにかく非難は受け

公共心

ぬ。その上、人に好い感じを與へると、世人にほめられる。だから、社會生活に處する第一の心得は、人に迷惑をかけぬやうに互に遠慮すること、實に遠慮心は公德の第一要件だといつてよい。

次に、公德の第二要件は公共心である。社會では、多くの人と共同し、また多くの公共物を使用するから、人に迷惑をかけぬと同時に、公衆の利益を思ひ、公共物を大切にせねばならぬ。私人の物をこはすと、迷惑はたゞその人だけに止まるけれども、公共物をこはすと、迷惑は一般公衆に及ぶ。たとへば、公園の樹本草花などは公衆を慰める目的で植ゑてあるのだから、これを傷つけると、公衆の

樂みを奪ふことになる。その他、集會・旅館・街路・汽車・汽船などで、一人の不心得のために、どんなに多數の人の不愉快・不利益を來すかは、我等の平生の經驗によつてもよくわかつてゐるとほりである。

文明國民の特色の一つは、各自がよく公德を守ることである。歐米の都市などでは、市民は公共物をほとんど私人の物と同一に視てゐるやうである。彼等はよく社會生活の眞意を理解して、これをなすだけよく行つて、こゝで自他の幸福を樂しまうと努めてゐる。彼等の多くは各自に庭園を有するほどの餘裕をもたぬから、公園を各自の庭園に代へ、三度の食事を家庭でするのが不便・不經濟だ

公德の發達は
文明の一特色

力強い公共心

から料理店を共同の食堂とし、交通機關もたえず盛に使用するところから、これを自分の物以上に大切にしている。公共物に對する考もかうまで進歩すると、もはや特にこれについて公德の養成を説くには及ばぬのである。ところが、我等には大いにその必要があるのは、我等の公共心がまだ十分に發達してゐないからである。我等は今少し眼界を廣うして、公共物もつまり私人の物に外ならぬ次第を考へて、自分から進んでこれを大切にせねばならぬ。公私の利害の一致するところに、始めて本當に力強い公共心が起り、従つてこれに基づくりつばな公德が成立つものである。

根本は心の修養

こんなにも、公德といふ言葉はおもに一般公衆に對する言動に關して用ひられるけれども、眞に公德を全うしようと思ふなら、やはり個人的にその心の修養から始めねばならぬ。社會生活では心の底までを問ふいとまがないから、表面だけでもさしつかへがないと思つてはならぬ。遠慮心でも公共心でも心の誠から出るものでなければならぬ。本當の公德はこんなものだからこそ、これを道德の一部として見る價值があるのである。

二〇 家に在つて

我等が學校に入ると、もう自分は全く學校の人であつ

學校と家庭

學校教育は家庭のため

て、家庭の人ではないやうに思はれ、そのため心は常に課業に追はれて、どうかすると家の仕事を怠るばかりでなく、父母に對する奉仕さへもおろそかになりがちである。それでは學校は一見家庭の妨となるやうに思はれるけれども、實は決してさうではない。

元來學校の教育は學校のために施すのではなく、むしろ家庭のために施すもので、とりわけ修身の教は最もさうである。教育に關する勅語に、父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニと仰せられてゐる教などは、學校ではたゞこれを説き聽かせるだけで、その座でこれを實行させることはできぬ。理科の知識はこれを教場での實驗によつてたしかめら

れるが、修身の教にはこんな便宜が少い。その教の徹底したか否かは、家庭に於ける生徒の行状を見て知られるものが多い。だから、我等は學校で受けた教はこれを家庭で十分實行せねばならぬ。我等の中には家業の手傳をしながら學校に通うて、少しは勉強を妨げられてゐるものもあらうけれども、これも修身の實地修業だと思つて、ますます勵むがよい。

我等が學校で學ぶのは、たゞ課業を修めるためばかりではなく、課業を修めると同時に、りつばな人格になるためだから、我等は常に優れた生徒であるとともに、善い子弟であるやうに心がけねばならぬ。ところが、學校では

りつばな人格
になるための
教育

成績の優等な秀才といはれる生徒でも、家庭では目上の人の戒を聽かず、わがまゝな子弟として持てあまされてゐるものも少くない。こんな生徒はまだ教育は何のためか受けるものであるかをよく會得してゐないものである。

家庭も教場

學校の課業、とりわけ修身の教は、家庭で十分これを実行せねばならぬといふ點から見ると、學校の教場は生徒の家庭にまで延びてゐるといつてよい。そして、先生の心は教場ばかりに止まらず、我等とともに家庭にも來て、我等の行状を見てゐるから、我等はこゝでよく目上の人に事へ、またよくその戒に従ふなど、すべて學校で授けら

れる教どほりに實行を勵まねばならぬ。家庭においてたゞ課業の豫習復習をつとめるばかりでなく、とりわけ修身の教を實行する生徒であつてこそ、始めて他日人格としてもりつぱになれるものである。

二一 偉人の感化

英雄崇拜

必要な何ものかを與へて、我等のためになつてくれる人は皆恩人だとすると、世のいはゆる偉人ほど大きな恩人は他にまたとあるまい。多少の金品をもらつても、我等は相當有りがたく感ずるが、偉人が我等に與へるもの

偉人は最大の恩人

人に善言を與ふるは布帛よりも煖なり。
(荀子、周代、趙の學者)

偉人崇拜の美風

は、とても金品などにくらべられぬほど貴い人格的感化といふ贈物である。我等はこれを得ると、それで自分の精神までも改善して、自分もまた偉人に近いものになることができる。どの國民にでも、自分の國の生んだ偉人のために神社や記念碑・記念像などを建てて、これをこの上なく尊崇するいはゆる偉人崇拜の風があるのはこれがためだらう。

國家には時々盛衰があつて、一時衰へてもまた盛になる場合などに最も役に立つものは、この偉人崇拜の風で、たとへば、我が明治維新の大業などもこの風に負ふところが多い。昔の忠臣義士が維新當時の人々に及ぼした

人格的感化がその効果をあらはして、あの大業ができたのである。また、かの乃木大將が古武士の風があつて極めて責任感の強かつたことなども、大將が幼少の時からこの偉人崇拜の空氣の中に成長したのが、その遠因をなしてゐるやうである。

かやうなわけだから、我等も偉人を尊崇し、ますますこの美風を盛にせねばならぬ。或は昔の偉人などはちがつた時代の人だから、とても我等を動かす力をもつてはゐないと思ふものもあらうけれども、偉人といはれるぐらゐの人の人格の力はなかく、強く、歲月の流によつてたやすく磨りへらされるものではない。現に我等が毎

學ぶべきはその精神

その例

日見てゐる凡人よりも、何百年も前の偉人の方が、我等の心の中にはよりよく生きてゐて、中には昨日まで生きてゐたやうな氣がするものさへある。また或は千年に一人か二人しか出ない稀に見る偉人などを手本にしても、とてもよくこれを學ぶことはできぬと思ふ人もあらうけれども、これも偉人とはたゞ非常の仕事をして世を驚かした人などに限つて、しかもこれを學ぶとすると、その細大の形跡についてまでも學ばねばならぬと思ふから、このことで、形跡などはその場合々々の必要に應じたものだから、我等はたゞその精神を學べばよい。

例を擧げて説いて見ると、あの赤穂義士の仇討の如き

は、現代の道德觀念からは多少の異議を挾む人もあらうし、また時代境遇なども我等とはすこぶる縁の遠いものだけれども、義士等が一意舊主の恩誼に報いるため、一命をなげうつて惜しまなかつた純忠な精神は、今日でもなほよく我等を感動させる。だから、我等がたゞよく精神を學ばうとさへすると、どんなに現代とかけはなれた人からでも、そのよい感化を受けるものである。封建時代の舊風俗舊思想を寫した昔の粗雑な小説や講談などの主人公に對してさへ、今日の青年が往々同情の涙を禁じ得ぬのは、やはりそのためである。元來偉人などといふと、人以上の人のやうに思ふのがそも／＼の誤で、偉人と

傳記を讀め

イギリスの詩人

は人の最もよい所を比較的多くその人格の中に取入れ、その上、これを誠意で一貫してゐるものに外ならず、またそれは學問・徳行・事業などいろ／＼の方面に出てるから、誰でも學ばうとしたら相當に學ばれるものである。

現代にも偉人がないわけではないけれども、現代の人については是非の論がまだ一定せぬばかりでなく、誰でもこれに接近して一様にその感化を受けることがむづかしいから、偉人の感化を受けるのには、その傳記や言行録によるのが一番よい方法である。傳記は、ミルトンがいつたやうに、實に「大切に防腐保存された俊傑の尊い生血」だから、その讀者に與へる刺戟はなかく、強い。西洋

偉人の存在は
更により大き
な偉人の世に
出るためであ
る。
(チャーソ
ン)

では、プルタークの英雄傳は多くの英雄豪傑を作り出したといはれ、我が國でも、靖獻遺言などは最も多く志士仁人の徒を養成してゐる。我等も時々偉人の傳記を讀んでその人物を想望し、たとひ自分はすぐさま偉人になれぬまでも、せめて世に偉人崇拜の美風をたやさぬやうに心がけるがよい。

新中學修身教本 卷二終

追 録

本文の處々について多少その所説を深め、もしくはこれを廣めて、餘力のある生徒の自學自習の用に供へる。

一 抑へよ、そして支配せよ

克己自制

慾よい慾いと悪い慾いを抑へることばかりに力を入れ過ぎると、いはゆる「勿れ主義」の消極的道德になつて、人を萎縮おしこさせてしまふから、むしろよい慾のために大いにその自由發展をはかつてやらねばならぬ。どちらかといふと、よい慾の發展によつて悪い慾の發展が妨げられるやうにするのが、一番よい修養の方法である。例へば、盛に運動することによつてゝの悪い慾を抑へるやうなものである。またどうせ人は娛樂を求めものだから、娛樂を禁

娛樂

善の追求

ずるよりも、よい娯樂をえらんでこれを興へる方が安全である。娯樂といふと一切悪いことと考へるのは、娯樂の性質をまだよく知らぬものである。たゞ娯樂にはいつも多く危険が伴ふから、これに對して警戒を加へねばならぬのである。だから、慾を抑へるについて我等の最も戒めねばならぬことは、いはゆる「角を矯めて牛を殺す」といふ弊に陥らぬことである。原則としては、善の追求はあくまで積極的であつて、たゞこの目的を達するための手段として、悪い慾を抑へる必要があるのである。

二 自重

自重と自信

人から褒められると、急に自分のえらさを感じて威張るものがあるが、これは自重に似てその實はさうでない。こんな人は自分の身を人から上げ下げしてもらふものだから、反對に人か

國民の中堅

らけなされると、また急に小さくなつてしまふ。自重はいふまでもなく自分で支持されるものでなければならぬ。自信に基づく自重こそ本當の自重といふべきである。ところが、まだ我等の年頃ではこの自信が十分に起らぬから、どうしても自分を輕んずることを免れぬ。だが、我等はこの際でも、よく他からどういふ期待を自分にかけてゐるかを考へて見ねばならぬ。自分でこそ自分を何でもないと思つてゐても、他では國家の將來の運命を決するものは我等青年だと見てゐるから、この期待に背かぬやうに心がけねばならぬ。中等學校の生徒に對しても、世間はこれを國民の中堅などと呼んで、かなり大きな期待をもつてゐる。だから、制服・制帽のまゝの中等學校生徒の卑しい舉動でも見ると、非難を加へずにはおかぬ。しかし、自重といふことを、あのいたづらにもつたいぶつて自分をてらふことと

取りちがへぬやうにせねばならぬ。

ドイツの詩人

○自信を得たら生きることが分る。(ゲーテ)
○人必ず自ら侮つて而して後に人これを侮る。(孟子)

三 眞實を愛する心

虚偽

虚偽の種類

アメリカ合衆國の心理學者

虚偽には想像的虚偽・利己的虚偽・愛他的虚偽及び病的虚偽などの種類がある。想像力の強いものはとかく事實に合はぬことをいひ、自分の利害に關するところから、心にもないことをいふ。これが初の二種類の虚偽で、臆病のためうそをつくの利己的虚偽の中に入れてよい。愛他的虚偽とは人のためにする義侠心などから不實の申出をするやうなもので、スタンレー

社會的虚偽

ピスマークとカヴールの問答

ホーデルはこれを英雄的虚偽と名づけてゐるけれども、その虚偽であるのに相違はない。普通の虚偽は、これをいふものはその虚偽であることを意識してゐるけれども、病的虚偽にはこれが缺けてゐる。だから、この場合には平氣でうそをつくばかりでなく、まふ人と人を欺き得たことの勝利を大いに喜ぶことさへある。青年には往々何となく威張りたいために法螺を吹く癖があつて、これが高じると、いつか病的虚偽になつてしまふ恐があるから、よく氣をつけてその矯正をはからねばならぬ。以上の外、社會的虚偽などといふものを區別する人もある。時の社會の風潮に調子を合せて行くために、知らず識らず心にないとをいふのは、必ずしも利己的動機から來るのではないから、これはやはり別種の虚偽と見てよい。
「うそは惡徳だと知りながらも、どうしてもいくらかこれをい

はぬわけにゆかぬ場合がある。こんな場合には、我等はどうしたらよいかといふに、なるだけ沈黙する外はない。或はもしてきることなら、こんな場合をなるだけ避けるがよい。とは、ビスマークの間に對するカヴールの答だが、我等のためにもよい参考にならう。

ドイツの宗教改革者

ドイツの文豪

○うそは雪だるまのやうに廻せば廻すほど大きくなる。(ルッテル)

○弱ければ弱いほどうそが多い、強い力は眞直まっすぐに歩く。(エアン、パウエル)

四 約束を守れ

道德はその自然的である點にその特別な價值が認められるけれども、その健全な發達にはやはり社會の制裁が必要である。社會一同がこぞつて褒めるか咎とがめるかする言行はとにかくよ

道德の發達と社會の制裁

老子(周代楚の學者)の著

く發達する。戰時中はどの國民でもすべてが勇者であるやうに見えるのは、すなはちその一例である。約束を守りうをつかぬことでも、社會の制裁がこれを後援しないと、その國一般の風習になるまでには至らぬ。だから、せめて學校内だけにでもこの制裁がきびしく行はれると、我等も約束を守るくらゐのことは必ずこれを實行するにちがひない。我等は個人的に修養すると同時に、社會的制裁の力を守り立てねばならぬ。

○信義に近ければ、言復ことばむべし。(論語)

○軽く諾するは信寡すくなし。(老子)

一〇 油斷大敵

得るは難く、失ふは易い

韓非(荀子の門人)の著
唐の文章家

○人は山に躓(つまず)かすして埒(あし)に躓(つまず)く。(韓非子)
○その恃(たの)むべき所を憂(うれ)ひ、その矜(は)るべき所を懼(おそ)る。(韓愈)

東洋・西洋と
勞働

一一 勤 勞

儒教では、力を勞するものは人を養ひ、心を勞するものは人に養はる。といつて、上に立つものは心を勞して、下にゐるものが勞働するものと教へた程で、東洋諸國では、昔からとかく勞働がいやしめられたのに反して、西洋諸國では、額(ひた)に汗(あせ)してパンを得るといふことを誰でも守るべき處世の原則としたので、勞働神聖などといふ思想が今でもよく普及してゐる。とりわけ近年勞働者の位置が高まるにつれて、一そう勞働を尊重するやうになつてゐる。ところが、我が國ではこれと正反對に、勞働を厭(いと)ふ風が日にます／＼盛になつて行く。これはその人のためによく

勞働神聖

我が國の弊風

陛下の御田植

ないばかりではなく、世界一般の趨勢(すうせう)にも反するから、將來に於ていろ／＼な悪い結果をもたらす恐がある。一方に手をつかねて坐食する人があり、他方に汗水たらして筋骨を勞する人があるといふ社會の状態は、たうてい永く續くものではない。貧富貴賤を問はず皆それ／＼相當に勞働を愛し、その上これに従事してこそ、社會の一部の不平も幾分緩和されるのである。承るところでは、天皇陛下御自身でさへ泥田(ぬい)に御脛(ひざ)を没(ひた)して、田植をあそばされるさうである。恐らく近時の弊風を矯めようとの聖旨だらう。我等のかんがみて深く反省すべきことではないか。

アメリカ合衆
國の著述家

○憂患に生き、安樂に死す。(孟子)
○働け、しからざれば餓死せよとは、造化の標語。(マーデン)

現今の諸問題
と中庸

一三 中庸

今日世上でやかましい紛々たる論争は、政治問題にせよ、社會問題にせよ、また思想問題にせよ、よく聽いて見ると、たいてい雙方で中庸を失うてゐる點を責め合つてゐる。政治問題だつて反對黨がいふほど悪いのではない。労働問題などはなほさらのことで、勞資が協調しないとほとんど何も仕事をする事はできぬ。ところが、一方に立つものがどうかすると餘り誇張するので、こゝにまたその反動として他方を極端に悪くいふものが出るのである。思想問題についても新舊の衝突が甚しいやうだけれども、これもやはり雙方が極端に馳せる結果で、絶對の新、絶對の舊を主張するものは、事實上はたゞの一人もない。だから、誰でもなるだけ中庸の議論をしようとなつとめると、世の中にはそれだけ理由のない論争が少くなるわけである。すべて

の産業を公有にしようとするからこそ、社會主義になつて世の非難を受けるけれども、或産業を國營にしようとしたところて誰も咎めはせぬ。

○過ぎたるはなほ及ばざるが如し。(論語)

○仲尼(孔子)は甚しきことをなさざる者なり。(孟子)

○その度を過せば物皆惡となる。(西諺)

一八 惡よりも善を

人に知らせるのは

○古語に、流丸は甌^{オウ}、輿^ウにとゞまり、流言は知者にとゞまるといへり。甌輿とはくぼき所なり。丸き玉をなぐれば轉じてやまず。されど、くぼき所にとゞまる。流言は根なしごとと讀む。實もなきあだなる雜説な

り。愚者はこれを誠ぞと心得て信じ語り傳ふれば、世にあまねく流布してやまず。知者は不實なることを信ぜずして、耳に聞けども口に言はず、その耳にとゞまりて言ひちらさず。これ流言は知者にとゞまるなり。(貝原益軒、大和俗訓)

一九 公德

公衆道德

自然と秩序

秩序と自由 自然は一足飛を許さぬ。自然は亂雑なやうでも、その實は一定の法則に支配され、物はその在るべき處に在り、力はその働くべき方に働いてゐる。連続してゐて切目が無い。充實してゐて隙間がない。自然はよくまとまつたたゞ一つの全體である。ところが、人の心は絶えず道理と欲望の間を往來して、一處に安んじてゐることが出來ず、従つて往々常軌を逸す

秩序は自由の産物

王陽明の語

ることもあり、甚しきは倒たふさに行ひ逆に施すといふやうなことさへある。これがため、社會生活にはいつも波瀾はらんが百出して、それが平靜であることはほとんど稀である。だから、秩序はどうしても自然のものであつて、人のものではないかとさへ思はれるのである。

しかし、またよく考へて見ると、人が昔から今に進んで來る間に、社會生活はますます繁劇はんげつになつたのにもかゝらず、我等は次第に秩序の習慣を得てゐる。文明國民の生活には一つの大きな特徴がある。それは自由と秩序が並び行はれることである。しかも最もよい秩序は最も大きな自由に伴うてゐるのが常である。公私の交際に最も秩序をたつとぶ國民は、必ず同時に最も自由を重んずる國民である。あの動中に靜があり、靜中に動がある。ともいふべき極めて健全な生活は、實にこの秩序と

秩序の本は心

自由の二色の絲で織りなされた綾錦である。こんな事實によつて考へると、本當の秩序は外からの強制によつてできるものではなく、結局は我等の心からこれを作り出さねばならぬ。従つて秩序の習慣を作るのにも、初は人の命令によく従ふのがよいが、次第に命令を俟つまでもなく自分から進んで秩序を守るやうにせねばならぬ。

社會生活の秩序の成立には、國民が社會的に訓練されること、即ち國民が共同生活に慣れることが必要だけれども、その本はやはり個人の心がけにあるから、個人の心がけを正しうすることを怠つてはならぬ。我等各自が自由の濫用を戒め、秩序の尊重に心を用ひさへすると、社會生活の秩序は自然にその基礎を据ゑるものである。

□本教身修學中制新□



大正十一年十月廿三日 刷
 大正十二年一月四日 訂正再版印刷
 大正十三年十月廿七日 修正三版印刷
 大正十四年一月一日 訂正四版印刷
 昭和二年八月廿四日 修正五版印刷
 昭和三年一月十三日 訂正六版印刷

大正十一年十月廿六日 發行
 大正十二年一月七日 訂正再版發行
 大正十三年十月三十日 修正三版發行
 大正十四年一月四日 訂正四版發行
 昭和二年八月廿七日 修正五版發行
 昭和三年一月十六日 訂正六版發行

著者 湯原元一

發行者 株式會社 東京開成館

代表者 松本繁吉

東京市牛込區榎町七番地

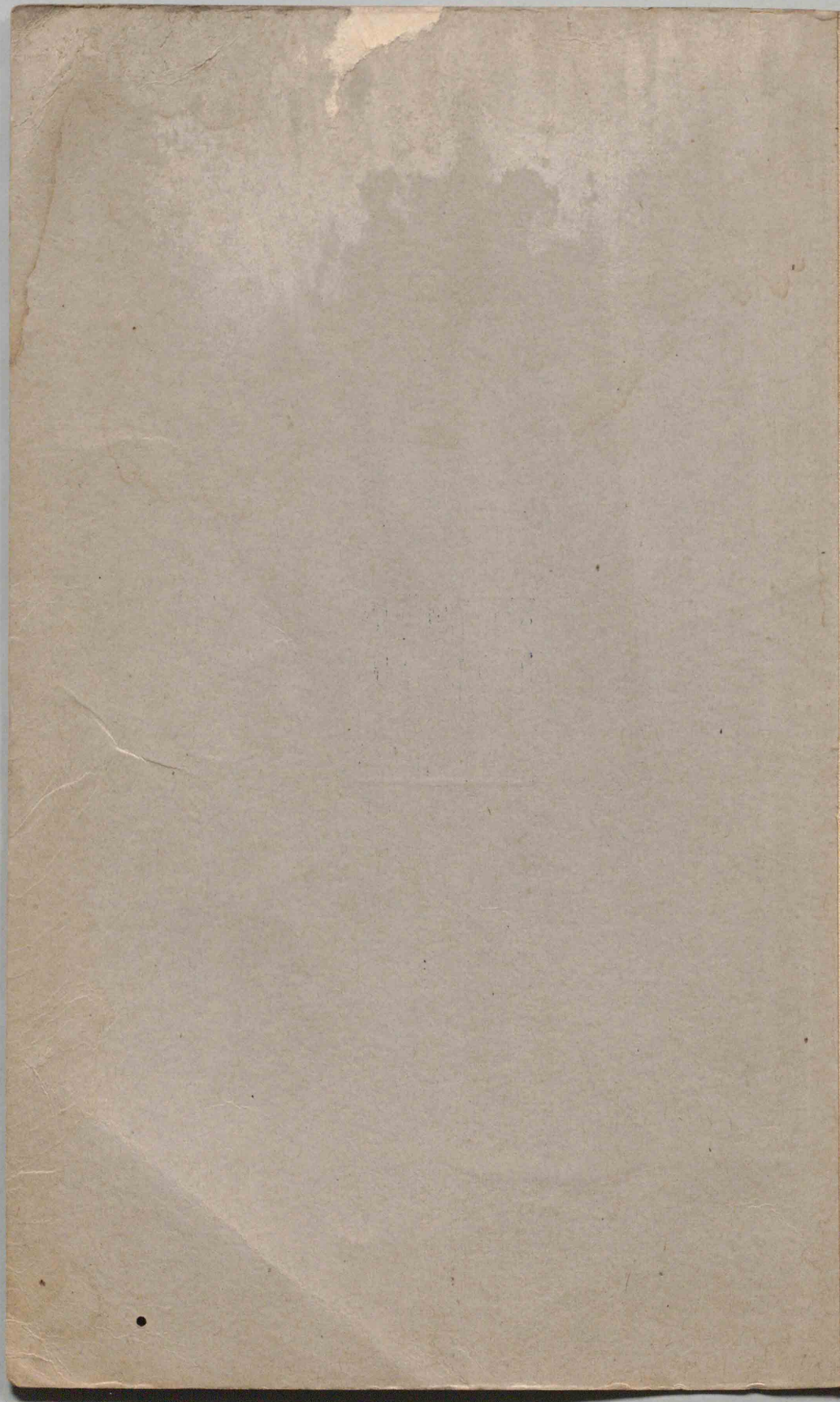
印刷者 竹内喜太郎

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館
 〔振替貯金口座〕 東京第五三三三番

一卷 錢九貳金
 二卷 錢壹參金
 三卷 錢四參金
 四卷 錢六參金
 五卷 錢八參金

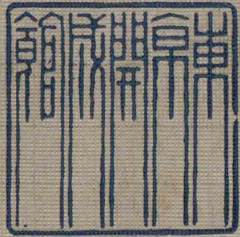
昭和四年度臨時定價 刷印社會式株刷印清日 金五拾貳錢



it
is
out



第二學年第十一學
十四番 出宮



広島大学図書

2000054294

